

転生ババアは
見過ごせない! ④

～元悪徳女帝の二周目ライフ～

ナカノムラアヤスケ
Ayasuke Nakanomura



ラウラリス

「悪徳女帝」と伝えられる
エルダヌス帝国最後の皇帝。
死後、三百年経った世界に転生し
気ままな旅を続けている。

ゲラルク

ラウラリスの腹心であった
「四天魔将」の一人。
凄まじい臂力の持ち主。

グスコ

以前、ラウラリスと
縁があったハンター。
経験を積み急成長中。

ケイン

国家機関「獣殺しの刃」に
属する青年。
何かとラウラリスに
振り回される。

ヘクト

ラウラリスと一時的に
行動を共にすることになる
商人兼ハンターの青年。
どこか胡散臭い優男。

登場人物紹介

目次

転生ババアは見過ごせない！ 4
〜元悪徳女帝の二周目ライフ〜

書き下ろし番外編

いずれは山を崩す出会い

転生ババアは見過ごせない！ 4

〜元悪徳女帝の二周目ライフ〜

プロローグ 仕事人ババアと一つの再会

美少女に若返り転生した、元悪徳皇帝ラウラリス・エルダヌス（享年八十余り）の趣味は悪党をとちめることだ。ついでに言えば彼女は食べることも好きだ。勇者に討たれて死んだ前世でも、神の手によって転生を果たした今生でもそれは変わらない。

つまり、悪党を捕まえて然るべきところへ突き出せば糧を得られる『賞金稼ぎ』という仕事は、ラウラリスにとっては趣味と実益を見事に兼ね揃えている。

「はあああ、一仕事を終えた後に食べる飯つてのはやっぱり格別だねえ」

その日のラウラリスも、世間様に迷惑をかけていた悪党の一人をハンターギルドに引き渡した直後であった。

此度の仕事は数日間を要したものであり、その間は保存食しか口にしていなかったのだ。ストレスも食欲も溜まっていたのも大きいだろう。

目の前に積み重なった皿の数は、彼女が食した料理の数。いくつもの皿の山は既に、

座ったラウラリスの頭頂部を超える高さになっていた。それでもなお料理を食べる速度が落ちないのだから驚きだ。

加えて言うならば、食事の作法はまさしく完璧であり、一つ一つの動作は美しさすら帯びている。彼女に料理を食べてもらえて、料理人どころか食材となった存在すらも喜ぶほどであろう。

ラウラリスの他にも店内には他の客がいたが、ほとんどの者が手元に料理があることを忘れ、一斉にラウラリスへと目を向けている。これだけの大食劇を間近で見せられれば誰もが気になっても仕方がない。果たしてあの細い躰のどこに入っているのか。どこまで食べられるのか。そもそもあの美少女は誰なのか。三者三様、十人十色の感情と思惑が集まる中、当人は我関せずといった具合に次々と料理を口に運んでいく。

故に、店に誰かが入ってきてても、その人物が堆く重なった皿に隠れた対面に座ろうが関係ない。腹が満たされるまで、心が満たされるまで存分に食事を楽しんでいく。

——やがて店に貯蔵された食材の数割は消費したのだと思うほどを味わったところで、ようやく食事が終了した。

「……ちよつと食べすぎたかね」

ぼんぼんとお腹をさすりながらほやいた台詞に、側で聞いた者たちは揃って『嘘だ

る?』と目を剥いた。あれだけの量を平らげて『ちょっと』である。頑張ればもつと入ったということか。とんでもない話である。

最後に食後の茶を頼むと、複数の店員が大急ぎで重なった皿を片付けていく。

皿の山が徐々に消えて、ラウラリスはそこでやっと己の対面に座っている者の顔を拝むことができた。誰かしらが座っていたことは既に気がついていたが、知った顔の呆れ果てた表情にムツとなる。

「……久しぶりに面を合わせるなり、随分とご機嫌な顔をしてくれるじゃないか、ケイン」

「よくもあれだけの量が収まるものだと感心していな」

ケイン・ディアハルト。

以前、奇しくも肩を並べて戦った人物。

表の顔はラウラリスと同じくフリーの賞金稼ぎ。その正体は、あらゆる手段を用いて国家の治安を維持するために設立された組織、王立特務機関『獣殺しの刃』の執行官。ラウラリスを開祖とする『全身連帯駆動』の老式を習得する強者でもあった。

「偶然に立ち寄った店に私がいち……つてわけじゃないんだろ?」

「ある意味では偶然だ。当初の予定ではお前と顔を合わせるつもりはなかった」

ラウラリスが頼んでいたお茶が届くと、いつの間にも同じものを注文していたのか、ケインの元にも茶が運ばれてくる。二人揃って湯気が立つ香りの良い茶を一口飲む。

「本来の目的は別にあるが、進路上にあるこの町に立ち寄ったところ、聞き覚えのある風貌をした女の話聞いたのでな。ハンターギルドを訪ねると、長剣を背負った女が名のある悪党を連れてきたばかりだと。受け取った報酬の使い道を考えれば、自ずと行き先はわかる。……あと、あれだけの量を食べる奴などお前しかいないだろう」

少しばかり浮き足立っている店を当たっていけば自然とラウラリスに行き着くという寸法だ。

「それで、一体全体私になんの用だ。……って、大方の見当はつく」

「ついでに言えば、お前好みなこと請け合いだ」

「その言葉、嘘じゃないことを祈るよ」

自分好み——という言葉に、ラウラリスは口角を吊り上げた。彼の口ぶりだけで、これから出てくるだろう仕事の概要はわかったも同然だった。

「秘密の話をするのに、ここはちょっと騒がしすぎる。場所を移そうか」

「そう思って、既に場は確保してある」

「話が早くて助かるよ。じゃ、行こうか」

ラウラリスは食事代の入った袋をテーブルの上に置くとケインを伴って店を出ていった。

第一話 なりゆきなババア

ケインとの再会から三日後。ラウラリスは険しい山道を、鼻歌でも歌い出しそうなほど気軽に登っていた。隣には、同じく苦もない様子の黒衣の青年——ケインの姿があった。

「こうやってあんたと歩いてると、前に組んだ時のことを思い出すよ。いやあ、あれはなかなか楽しかった」

「アレを楽しいと言えるのはお前くらいだ」

陽気なラウラリスに対して青年は渋い顔になる。彼にとっては愉快な経験ではなかったのだろう。

「それに、全部が同じというわけでもない」

背後を振り返る青年。一緒になってラウラリスも見ると、後についてくる三十と余人の集団。誰もが武装しており、少なからず緊張を孕んだ顔つきをしていた。

——ケインが持ちかけた仕事は、反社会的組織『亡国を憂える者』活動拠点の壊滅

作戦。

『亡国』は三百年前に滅亡したエルダヌス帝国の再興を目論むテロリスト。帝国最後の皇帝であるラウリスにとつて『亡国を憂える者』の壊滅は、今現在における最優先事項だ。以前にケインと組んだ時は『亡国』の幹部の捕縛のため、隠密行動の必要があり少人数での行動が求められた。だが今回はそれなりの規模を持つ拠点の殲滅。動員される人数も相応に多い。

元々、十分な戦力は揃えていた。しかし、相手が想定以上の手練れである可能性や切り札を備えている可能性も十分に考えられる。

そこで白羽の矢が立ったのがラウリス。移動中に立ち寄った町にラウリスが滞在していることを知ったケインが彼女に声をかけた次第である。断る理由は皆無と言っているのだらう。ラウリスは二つ返事で依頼を了承した。

「あなたのツレに、銀級ハンターか。ツレの方はともかく、ハンターの方はどうやってあの数を揃えたんだい」

銀級ハンターともなれば、最も数の多い銅級から昇給した、ハンターギルドの中では『一流』と呼ばれる部類の人間だ。一つの支部に二人か三人いる程度の人材をここまで集めるのは並大抵ではないはず。

「ギルドは国家から独立した組織だが、完全に無縁じゃない。上層部にもそれなり顔が利くからな。さすがに金級と呼び出すには時間が足りなかったが……」

金級ともなれば、それこそ国家に五人いるかどうかという超一流の部類だ。召集するのは難しかったのだらう。

「ま、この人数に加えて、私とあなたがいたりやあどうにかなるだろ。これで駄目だったら、それこそ軍隊を連れてこなきゃ話にならんよ」

「同感だな」

人数は軍の小隊規模であろうが、戦力的には中隊規模にも決して引けを取らないとラウリスは見ていた。人を見る目に長けた彼女からして、それだけの人材が揃っている。ただ一つだけ。悪い意味ではないがラウリスにとつて予想外の人物がこの作戦に参加していた。

「悪いがちょっと離れるよ。先導は任せた」

「別に許可を取る必要もないが、どうした？」

「作戦が始まる前に話をしときたい奴がいてね」

ケインに断りを入れてから、ラウリスは進むペースを落とす。背後から幾人かに抜かれ、目的の人物の隣に並んだ。

「よう、久しぶりだね」

「お嬢さんか。いや、あんたとまた一緒に仕事することになるとは思ってもみなかった」

「そいつあ私も同じだよ、グスコ」

神の采配さいはいによって、死亡から三百年後に若返った姿で転生したラウラリス。その直後しばらくの間滞在した町で知り合ったハンター。それがこの男、グスコだ。

最後に会った時は銅級ブロンズであったはずなのだが。

「この作戦に参加してることとは銀級シルバーに昇格したみたいだね。おめでとうさん」

「ははは……その、おかげさまでな」

ラウラリスの言葉に、グスコは照れ交じりに返した。

ケインからの依頼を承諾したラウラリスは、彼と共に『亡国』の拠点から一番近い町を訪れていた。この仕事——作戦に参加することになっている人員は、敵方の察知を避けるためにハンターギルドではなく、町の空き家あきやに集まっていた。

案内されたところで、参加メンバーの中に知った顔——グスコがいたことにラウラリスは大きく驚いた。無論、それはグスコも同じであった。

ラウラリスが到着するなり、作戦の説明や打ち合わせをし、そこからは分散行動や夜の移動。これまでは、顔を合わせることはあっても会話をするチャンスはほとんどなかった。

険しい山道の最中だったが、ようやく話をするチャンスがきた次第である。

「お嬢さんのことはハンターの間でも話題だよ。随分と活躍してるらしいじゃないか」

「活躍するつもりはないんだけどねえ」

「いやあ。お嬢さんの場合、何をやっても目立つから仕方がないと思うぞ」

「失礼だねまったく」

中身が八十過ぎの美少女が小さく憤慨ふんがいする。怒っている姿さえ絵になるほどだ。その上で、様々な事件に自ら首を突っ込むのだから、当人が喧伝けんでんしなくとも周りが放っておかない。彼女の話が広まるのはむしろ必然であろう。

「献聖教会けんせいの代替わりの騒動にもお嬢さんが絡んでるって聞いたよ。……実際のところはどうなんだい？」

「コメントは控えさせてもらおうよ。守秘義務つてのがあるからね」

絡んでいるというか、騒動の渦中かちゅうに身を置いていたわけだが、それを認めるのは躊躇ためらわれる。もっとも、ラウラリスの反応でグスコは噂うわさの真偽を察したであろう。

「私のことはこのくらいで。それよりもあんただよ。いつ銀級シルバーに昇格したんだい」

「ほんの一月前さ。上手い具合に依頼をいくつかこなせてな。運がよかった——とまで謙遜するつもりはないが、どうにも最近、自分でも驚くくらいに調子が良いんだよ」
 ラウラリスの目から見て、雰囲気の変わりように、一瞬誰だかわからなかったほどだ。動き一つ一つのキレに関して意外なほどに成長を遂げていた。

足の運びから体幹の安定具合。改善の余地は多々あれど、動きのどれもが一流のそれに近付きつつあった。

現に、人の手が入っていない険しい山道を歩いているというのに、今もこうして話ができている。最初の町で知り合った頃のグスコでは、会話はおろかこの進行速度についていくのがやっとだっただろう。

「お嬢さんも前よりも強くなってるんじゃないか？　なんか圧が一層増して見えるぞ」
 「増して……なんて女性に対して言う台詞じゃあないよ」

「おっと、こいつは失礼した」

冗談と本気が半々ぐらいの謝罪をするグスコだったが、最初に口にした言葉が単なるお世辞ではないとラウラリスは感じていた。彼の言う通り、転生したばかりの頃に比べたらウラリスは若返った今の躰からだを使いこなせている。

そういうえば、とラウラリスは思い出す。

初めて会った時から、グスコはラウラリスを侮あなだることなく対等以上の存在として接してきた。その時からなかなかの慧眼けいがんだとは思っていたが。

（こいつあ、無意識だろうが躰からだの動かし方がわかり始めている。きっかけは……私と危険種の戦いを見たからかもしれないね）

ラウラリスは仕事の一環で、最初の町の付近に出没した銀級相当シルバードの危険種を討伐した。その戦いをグスコは間近で見ていたのだ。

見取り稽古けんこ——という、他者の動きを見て学ぶ鍛練がある。コレが案外馬鹿にならない。類たぐいい希まれなる眼力を有する武人は、一度見ただけでその動きを完璧に再現できるという。

さらに言えば、ラウラリスは全身連帯駆動の使い手。全身を余すことなく連動させて使うこの動きは、究極の身体操作術と言っても過言ではない。

達人か、あるいはそれに匹敵する慧眼けいがんの持ち主にとっては、最高のお手本とも呼べるだろう。もしかしたら、ラウラリスの動きを見て、得るものがあった。それがグスコの成長に繋がった。

もちろんコレはただの推測だ。人の才能、成長というのは理屈だけでは片付けられない。ましてやグスコとは久々に会ったのだ。彼の成長のきっかけはもしかしたらラウラ

リスとは無関係のところにある可能性だってある。だとしても、若人の成長を見るのはいつだって良いものだ。

「……ところで、噂とはまた別の話になるんだが」

グスコは他者に聞こえぬよう声を潜めた。

「あの先頭を歩いている奴とお嬢さんって知り合いなのか？ 随分と親しげだったが」

「なんだい、気になるのかい」

「いや、別にそつちの方面ではさらさら興味ないが」

色事に関してかとニヤついたラウラリスだったが、グスコはさっぱりと否定した。

思ったような反応が返ってこず、ラウラリスは拗ねた風にむっとした。

「全く気にならないわけじゃあないが……」と、グスコはフォローのつもりか前置きをしてから。

「アレって、国が派遣した騎士様だろ。どんな経緯で知り合ったのか、興味があるわけよ」

「あー、以前に仕事を一緒にした。それ以上でもそれ以下でもないよ」

ケインの所属する『獣殺しの刃』は国が直接運営する組織であるが、その表沙汰にできない活動のために、公式には存在しないことになっている。故に、彼らは表立って

は『王国に属する騎士』という当たり障りのない役職を演じている。

あるいは、ラウラリスと組んでいた時にケインが最初に口にした通り、『フリーの賞金稼ぎ』と名乗ることもあると当人は言っていた。単独で動く場合は後者でいた方が楽だが、機関以外の人間を動員する場合は騎士の身分であった方が何かとやりやすいのだ。そうだ。

グスコは心底呆れたような顔になる。

「……王国の騎士と一緒に仕事するとか、お嬢さん本当に何やってんだよ」

「うるさいよ。成り行きってやつだ」

その成り行きも、元を辿ればラウラリスが己から進んで事件に関わったことが発端である。

結局のところ、だ。

ラウラリスの『見過ごせない』という性分は、彼女を様々な出来事の渦中に置く最大の原因だったりするのだ。

今回の作戦に多数のハンターが起用されたのには、いくつかの理由があった。

ハンターの活動の場は、整備された街道や開けた平原ではなく、ほとんどが自然の多い野生地帯。木々が生い茂った森林や荒れ果てた山岳などだ。

国に仕える一般兵も野戦の訓練は行うだろうが、常に実戦の場として身を置くハンターとは経験値が違う。また彼らは物静かに森や山を移動する能力に長けている。それは偏に『獲物』を確実に仕留めるため。

『亡国』の拠点が存在するのは、山岳の途中にある隙間。そこにかつての戦争で使われた砦が存在している。現在においてははもつと安全で時間もかからない道が開発されており、既に放棄されて久しい。ほぼ手つかずで廢墟と化していたそこに『亡国』の者たちが手を加え、活動拠点の一つとして利用しているのだ。

出入り口は正面と裏の二つのみ。周囲は岩肌が防壁となっており、武装した兵士が降り降りすることは不可能。まさに天然の要塞だ。

だが、慣れたハンターであれば難しくはない。よって、真正面からの正攻法ではなく、側面からの奇襲が可能となるのだ。

「とりま、先手を打つのは成功したわけだが」

手近にいた『亡国』の構成員を長剣で斬り捨てながら、ラウラリスはほやいた。

奇襲からの拠点攻めが始まって既に幾ばくかの時間が経過した。

当初の予定通り、要塞の付近まで崖を降りて近付き、全員が配置についてから作戦開

始。いの一に二つの門に配置された『亡国』構成員を鎮圧し占拠。そこから一気に攻め入っている最中だ。砦のあちこちで戦闘が始まっており、至るところから金属の擦過音や物々しい足音が木霊している。

ラウラリスは単独行動。彼女が扱う長剣は味方が密集していると戦いづらく、また一人で自由に動いた方が最も戦果を上げられると考えたからだ。

「ケインやグスコたちだけじゃなくて、他のハンターたちからも同意を得られたけど……ちよつと複雑だよ」

ハンターでもないのに、ハンターの間でもその強さが知れ渡るほどに、ラウラリスの名はギルドの中でも噂になっていくことだ。

それはともかく――

砦に詰めている『亡国』の構成員は百人を超えている。テロ組織の人員というだけあり、ほとんどの者がそれなりの戦闘力を有している。

だが、銀級ハンターは戦闘のプロ。そこに、ケインをはじめとして、騎士に扮した『獣殺しの刃』も参加。何よりもラウラリスがいるのだ。

人数に限れば『亡国』側が有利であっても奇襲攻めに浮き足立っており、統率的な対処は困難。こうなれば人数差でのごり押しも難しく、各個撃破の憂き目に遭う。

ハッキリ言って、奇襲が成功した時点で勝敗は決していたと言っても過言ではない。――敵が人間だけであればの話ではあるが。

ラウリスが歩を進める通路の先から、明らかに人のものではない遠吠えが響き渡る。その直後、こちらへ急速に接近する足音。

奥から現れたのは、頭に角が生えている二頭の狼。その鋭い先端をまつすぐにラウリスに向けている。

「やれやれ、ちよくちよく出てくるね」

溜息交じりに呟くと、ラウリスは長剣を担いだままのんびりと歩く。気負いなど欠片も感じられない彼女に、目を血走らせた狼が襲いかかった。

額の角で少女の躰を貫かんと飛びかかる。だが次の瞬間に、二頭の狼は角の先端から股間まで正中を分かつように断たれ、飛びかかった勢いのままラウリスの左右側面を通り抜けて背後に落ちた。

考えるまでもない。ラウリスの放つた神速の剣戟が、迫り来る狼を両断したのだ。「いつもならちゃんと処理するんだが……後で供養してやるから勘弁しとくれ」

背後を振り向き、詫びの台詞を狼たちの死体に贈ってからラウリスは歩を進める。この岩に攻め入ってからというもの、狼に限らず様々な種類の『危険種』が襲いか

かってくる。ハンターが召集された最大の理由は、彼らが常日頃から相手取っている獲物が危険種であることだった。

『危険種』は名の通り、自然に生息する動植物の中でも人間を害する危険性を秘めた類いを指している。具体的な区分は存在していないが、通常生物の生態から外れたものがほとんど。目に映る他の生物を手当たり次第に襲う獍猛性を秘めている――というのが大概の場合。

また、繁殖力が桁外れに強く周囲の生物を食い尽くす恐れがあったり、存在するだけで強い毒素を撒き散らし生態系を崩壊させたりする可能性を有した生物も、同じく危険種に認定される。

この岩ではそういった類いの危険種が飼育されているのだ。もちろん、単なる趣味や愛玩が目的ではない。危険種を戦力として運用する実験のためである。

「馬鹿っつのは、時代が変わっても変わらず馬鹿だねえ。危険種に分類されてる時点で手懐けるなんてどだい無理な話だよ」

ラウリスはこれまで『亡国を憂える者』と数度対峙したことがある。彼らのいずれもが別々の研究を行っていた。

ある者は亡き皇帝の魂を現世に呼び出し、生きた人間に憑依させて復活させようとし

た。ある者は、亡き皇帝に殉ずるための肉体を作り上げ人体実験を繰り返していた。

この砦に潜む幹部は『軍団』を生み出そうとしていた。帝国の権威を象徴する『武力』を得る方法を模索し、辿り着いたのが『危険種の軍事利用』である。

「そりゃあねえ、帝国もそいつに手を出したことはあるんだけども」

かつての帝国に限らず、危険種の軍事利用というのは古から研究されてきた。中には一定の効果を発揮した事例もあるが、その大半が失敗に終わっている。成功事例にしても費用と効果が釣り合わず、やがては頓挫したのがほとんどだ。

確かに危険種生物を軍の一部として運用できれば強力だ。だが、それが制御できる力であればの話である。

「小型の危険種に関してはそこそこ調教できてるようだが……どうだろうねえ」

ともあれ、この砦には人間以外にも多くの調教された危険種が配備されている。どの程度制御されているかは不明だが、少なくとも『亡国』の人間を襲わない程度の調教はされているようだ。

つまり、この作戦では人間と危険種。その二つを相手にすることになる。

敵が危険種を使うのなら、こちらは危険種討伐の専門家を投入するのが道理。だからこそこの作戦に銀級ハンターが起用されたのだ。

「お？　ありやグスコじゃないか」

何気なく通路の窓から外の様子を窺うと、ちょうどグスコが『亡国』の構成員と、調教された危険種と対峙している場面が見えた。ラウラリスと違い、ハンターたちは二人一組で行動している。グスコの傍らにも同じくハンターがいる。

そのハンターも銀級というだけあり、見事な立ち回り。だがそれはグスコも同様だ。人間と危険種という異なる動きをする敵を二つ同時に相手にしながら、決して負けていない。

やはり、動きの質が以前とかなり異なる。踏み込み一つとっても、無駄が省かれた合理性を秘めている。当人は無自覚だろうが、動きにはやはり全身連帯駆動の片鱗を感じさせた。

「いいねいいねえ。ちよつと見ない間に、随分と腕を上げたじゃないか」

窓枠に肘をつき、ラウラリスは成長した孫を見るような心境でグスコの活躍を眺める。そうこうしているうちに、グスコが危険種を斬り捨て、構成員を当て身で無力化した。まさしく銀級ハンターにふさわしい立ち回り。

グスコとハンターは手早く構成員の手足を縛り上げると、よその援護に向かうために走り去っていった。

「お見事！」

そんな彼らにパチパチと、ラウラリスは称賛の拍手を送った。

「……………お前は何を暢気に拍手などしている」

「いやなに、若い衆の活躍を見て褒めてやりたくなくてさ」

横合いからかけられた低い声に、ラウラリスは振り向く。渋い顔で腕を組んだケインが、咎めるような視線でラウラリスを刺していた。

もちろん、ケインが近付いてきているのには気がついていて。その上で、あえて彼が近付いてくるまで放置していたわけだ。

「相変わらず、お前の言うことはわからないな」

「そういうあんたも相変わらずのしかめっ面だね」

「誰のせいだと思っっている」

「はっはっは」

敵陣の真っ只中というのに、二人は酒場で言葉を交わすような空気を醸し出していた。だがそれは完全に気を抜いているわけではない。双方、常に臨戦態勢であり、いつでも最善最速で動ける状態を保っていた。その上でこうした会話をしているのだ。

「首尾は？」

「今のところ、目立った問題は生じていない。ハンターたちもよくやってくれている」

「そりゃ重畳。で、どうしてあんたがこっちに来てるんだい」

「拘束した構成員の一人に、幹部の居場所を吐かせた。その情報をもとに進んでいたら、お前がいただけの話だ」

「あの馬鹿どもからよく情報を引き出せたもんだ」

『亡国を憂える者』は妄信的に帝国——ひいては最後の皇帝を信奉している。ラウラリスとしては迷惑な話だが、少なくとも我が身惜しさに簡単に口を割るような可愛い連中ではない。そいつらの口を割らせたとなると——

「幸いにも、周囲にハンターはいなかったからな」

ふうと息を吐き、肩を竦めるケイン。おそらくは、人様にはあまり見せられない手段を講じたのだろう。テロリストに人権はないと考えているラウラリスは特に咎めなかった。

「むしろ、どうしてお前がここにいるのかを聞きたいくらいだ」

「私は一番守りが堅そうな箇所を狙ってただけだよ」

さらっと言っただけのけたラウラリスに、ケインは口をへの字に歪めた。

守りが堅い場所というのはつまり、その奥に最も重要なものが存在している証拠だ。

ラウラリスの考えは合理的だが、やり方が非合理的だった。そしてその合理的で非合理的な判断を実行できる能力があるのだから始末が悪い。

「アレだ。私とケインの判断が合致したってことは、いよいよこの奥に親玉がいる可能性が高くなったわけだ」

ラウラリスは長剣を担ぎ直すと、意気揚々と通路の奥へと歩き始めた。その気軽な背中を見て溜息を一つこぼし、ケインは後を追った。

奥へと向かう途中、幾度か構成員やそれらに使役された危険種と遭遇はしたが、彼らを止めるにはあまりにも役者不足であった。

一般人では太刀打ちできない危険種ではあるものの、この些で飼育され使役されている種はさほど強い部類ではない。銅製のハンターであつても油断しなければ倒せる程度だ。構成員にしても同程度。

特に奇を衒った展開はなくラウラリスとケインはすんなりと『亡国』の幹部の一人——ビスタの元に辿り着いた。

「我らの尊き使命を理解せぬ愚者どもが！ 死してその魂が彼の皇帝を称える糧となることを喜ぶがイイ！」

小太りの壮年の男——ビスタの外見を一言で言い表すならそんなところであろう。これまで遭遇してきた幹部と比べるといささか個性に欠ける。町で探せばどこにでも見つけられそうな普通の男に思えた。

だが、ラウラリスたちの意識は喚く小太り男ではなく、その背後にいる巨大な存在に向けられていた。

一見すれば、蜥蜴のような爬虫類。だが、全身が鱗に覆われたその頭には捻じれた鋭い角が生えている。ここに来る間に遭遇した狼の頭に生えていたそれとは雄々しさがるで違う。

人の頭など容易く噛み砕けそうな顎から生え揃った牙に、鎧を纏っていてもバターのよように易々と切り裂けそうな鋭い爪。体長は、大柄な熊の倍以上はありそうだ。

竜種——危険種の中でも特に危険とされている存在である。

一般人なら出会った瞬間に死を覚悟する。ハンターであろうともそれは同じ。銀級ですら、一人では絶対に太刀打ちできない相手。討伐には金級のハンターが必要とされるほど。記録には、たった一頭の竜によって、国が一夜にして壊滅したという事例もある。「なんでこんな木っ端テロリストのアジトに『竜』がいるんだい。明らかに出てくる場面を間違えてるよ。もうちょい盛り上がる状況とかだろ、普通は」

「場面がどうのこうのという問題ではないだろ。……ビスタが飼育する危険種の中に、こいつの情報はなかった。おそらく、徹底的に秘匿してたんだろう」

だというのに、それを前にしたラウラリスとケインは、道中と変わらぬ調子で言葉を交わす。悲愴感どころか、危機感すら匂わせない二人の様子に、意気揚々と叫んでいたビスタの顔が引きつるほどである。

「わ、我らの研究はついに竜をも制御する術を生み出した。この竜は私の意に従い、思うがままに動かすことができる。それがどういう意味かわかるか!？」

喚き散らすビスタに、冷たい目を向けるラウラリスとケイン。虎の威を借る狐——ならぬ竜の威を借る小太り男であろう。

ビスタの研究とやらもハツタリの一言で済ませられるものではない。竜は唸り声を上げながら静かに佇み、ラウラリスたちを睨みつけている。一方で、側にいるビスタには敵意を向けていない。

危険種の生態も動物と同じ千差万別であるが、少なくとも自身の側で叫ぶ存在を無視はしないだろう。ビスタが殺されずに無事であることが、竜の使役に成功しているという証左だ。

「でもまあ、私たちが一番乗りでよかったね。他の奴らじゃあちと荷が重い」

ラウラリスの剣が翻る。ただそれだけで空気がうねり風が巻き起こる。

「ひいつ!? や、やれえ! 奴らを殺せええ!」

ただならぬ気配を感じ取ったビスタは喉から悲鳴を搾り出すと、いよいよ竜をけしこける。すると、竜は砦全域に響き渡る咆哮を発し、地鳴りを響かせラウラリスたちへと向かってきた。

その傍ら、ビスタは引きつりながらも笑みを浮かべ、奥へと消えていった。おそらく、正面と裏手の他にも緊急用の脱出通路があるのだろう。

「俺はビスタを追う。任せても大丈夫か?」

「あんなの、慣れりゃあただのデカイトカゲさ」

「その妙に自信に満ちた態度も変わらずか。だが、この場は任せただぞ」

ラウラリスに告げてから、ケインは駆け出す。竜を避けるように大回りに走り、ビスタが消えた方へと向かう。当然、竜は阻もうと動くが。

「貴様の相手は私だ」

声に竜の意識が吸い寄せられる。声の主が秘める危険性を察知したのか、首を巡らせそちらを見ると、ラウラリスがいた。

「あの愚か者に操られているのだから。……野に放つわけにもいかないからな。見過ご

せない以上、悪いがこの場で討ち取らせてもらおう」
 ラウラリスは伝わらないとわかっていつつも、一つのケジメとして竜へと告げ、刃を振るうのであった。

——十分後。

砦の内部を大方制圧したグスコを含むハンターたちは、幹部と思われるビスタの元へと急ぐ。ラウラリスとケインが先行しているのは知られており、その加勢に向かっているのだ。

銀級ハンターが十余名。誰もがその顔に強い緊張を貼り付けていた。何故なら、尋問した構成員の一人から、驚くべき情報を告げられていたからだ。

——ビスタは竜種の制御に成功している。

それを告げた構成員の顔は、拘束されながらも愉悅に歪んでいた。どれほど劣勢に追い込まれようとも、最終的に勝つのは自分たちだと確信している——そういった類いの顔だった。

(いくらお嬢さんとあの隊長さんが強いからって、竜種に二人で挑むなんてのは無謀すぎる……)

内心でラウラリスの身を案じつつ、グスコは走る。

グスコや他のハンターたちも、劍姫の実力は聞き及んでいる。加えて、国から派遣されてきた騎士たちの強さも、戦う場面を目にしており、彼らを率いるケインの強さも並大抵ではないと推し量れる。

だがそれでも、竜種を相手にするには無理がある。

銀級ハンターであれば人数を揃え、作戦を立てて地の利を生かし、万全の態勢を整えて挑むのが通常だ。突発的な遭遇戦であれば、迷わず退却。もし不可能であった場合、戦っても全滅する可能性が高い。

構成員が吐いた情報がハツタリであることも考えられた。しかし残念ながら、この場にいる全員が砦全域に響き渡る咆哮を耳にしている。少なくともアレを発することが可能な危険種が存在しているのは間違いない。最低限、情報の真偽を確認する必要はあった。

そうであってほしくないと皆で願いつつも、最悪の可能性を覚悟し、ビスタがいるという砦の奥へと進む。

最後に、砦を揺らすほどの地響きが断続的に伝わってくる。積もった埃がパラパラと落ちてくる中、その揺れは徐々に大きくなっていく。

ついにはビスタがいるとされる部屋の前に辿り着く。いつの間にか、断続的に響いていた揺れが途絶えていた。ハンターたちは一度それぞれ顔を見合わせるが、意を決した表情になり、勢いよく扉を開く。

「あ、お疲れさん」

覚悟を決めたハンターたちを出迎えたのは、一人の少女が発した気軽な声。そしてその後ろには首を断たれ頭を失った巨大な獣がいた。

第二話 ババアの誇りと傷

グスコをはじめ、ハンターたちは揃って啞然あぜんとなる。

（なんだか前にも似たようなことがあったなあ……）

既視感を覚え拍子抜けしてしまうグスコだったが、だからこそ他の者よりも立ち直りが早く、咳払いをして調子を取り戻す。

「……お嬢さん、色々と聞きたいことはあるんだが、その後ろにいるやつは？」

「これかい？ ビスタって奴が飼ってた竜だよ。ああ、ケインはそのビスタを追って先に行った。そろそろ戻ってくるんじゃないかねえ」

「ってことは、その……お嬢さん一人でその竜を倒したのか？」

「まあね」

戦果を誇示こじするでもなく、実力をひけらかすでもない。事実を淡々と認めるその様は、圧倒的強者の気品を感じさせる。

「まったく……ちよつとは強くなったと思ってたんだがなあ。これじゃ自信なくすぞ、

俺は」

扉を開く前まで抱えていた緊迫感などとうに霧散してしまった。改めて見せつけられた力量の差に、肩を落とすグスコ。剣を担ぎ腰に手を当てたラウラリスが大きく笑う。「はっはっは。せいぜい精進することだ。あんたなら、あと五年も真面目に頑張つてりゃあ、このくらいできるようになるかもしれないよ」

「簡単に言ってくれるよ、本当に……」

ラウラリスの冗談に、グスコは吐息を漏らしながら笑った。

ただ、ラウラリスとしては完全に冗談というわけではない。このまま五年、真摯に実力を培い、いくらかの幸運が重なればあるいはと推測していた。

「やれやれ、本当に一人で倒してのけるとはな……」

奥から戻ってきたケインが、多分な呆れと若干の驚きを内包した声を発する。

その片手には、ボロボロになったビスタが引きずられていた。呻き声が漏れ聞こえているので、生きてはいるようだ。

「どうやら馬鹿は捕まえられたようだね。ご苦労さん」

「こいつ自体は完全な研究職だったからな。追いついてしまえばどうとでもなる」

ケインはぞんざいな手つきでビスタをラウラリスの前に放り投げる。両腕がどちらも

あらぬ方向に曲がっているのはきつと、自殺を防ぐためだろう。

ビスタは地面に這いつくばりながら痛みにも呻き、顔を巡らせると忌々しげにラウラリスとケイン、ハンターたちを睨む。

ところが、ふと首なしの竜を見て目を見開く。

「わ……私の竜が。帝国最強の戦力となり得るはずだった私の研究成果が……そんな馬鹿な」

「あの程度が帝国最強とは、片腹痛い」

「——ッ」

ラウラリスから滲み出す冷酷な気配に、ビスタが凍りつく。悲鳴を上げたいというのに、声の出し方がわからなくなるほどの威圧感。

「少なくとも、今の私一人に勝てないようでは、その看板は背負えないな」

「ひ、一人で……だと——ッッ!?」

かつての帝国で最も強かったのは紛れもなく、悪徳皇帝ラウラリス・エルダヌス。今のラウラリスはその全盛期にはまだ及ばない。それに負けるようでは、帝国最強を名乗るのもおこがましい。

「危険種を使役しようという発想自体が、そもその失敗だ」

「何を——」

「あの竜が、危険種本来の強さを有していたら、もう少し手こずっていた。その辺りを理解できていなかった時点で、貴様の研究とやらは前提からして破綻していたのだよ」
 人の制御が行き届くように調教されれば、それだけ野生の本能が薄くなる。その躰を十全に動かすために最適化された思考を弄られてしまえば、弱くなって当然だ。

軍で運用される騎馬は、品種改良されている特別製だ。人を乗せて戦うことを前提に配合され育成されており、だからこそ戦場で能力を発揮できるのだ。

危険種の場合、人が操れる程度に墮とされてしまえばもはや危険種ではない。ただの家畜に成り下がる。

膨大なコストをかけて調教した危険種が、危険種本来の強さを失ってしまったえば意味がない。過去に帝国で行われた研究が頓挫したのも、結局はこの辺りが理由だ。

「無駄な努力、誠にご苦労だった。己の無駄骨を存分に悔やむがいい」

「—— ツツツツ」

自らの成果を徹底的に貶められ、ビスタはいよいよ涙を流し始める。感情が暴発し、ラウリスの威圧がなくなろうとも声を出すことを忘れて、喉から声にならない悲痛な音を漏らす。

「おい、下手に煽るな。舌を噛まれて死なれでもしたら困る。こいつからはまだ何も聞き出してないんだからな」

ケインはビスタの躰を押さえつけると、今にも舌を噛み切らんばかりの口に縄を咬ませた。

「どうせ何も吐かないんだ。今死ぬか後で死ぬかの違いだろ」

「だとしても、だ」

咎めるような視線を向けるが、ラウリスは腕を組み、ぷいっとそっぽを向く。まるで己に非はないと言わんばかりだ。

その仕草は、直前まで冷酷な強者の気配を滲ませていたとは考えられないほど、外見年齢相応の可愛らしいものであった。

「なんだかよくわからんが……お嬢さんには隊長さんも苦労してるみたいだな」

「わかってくれるか。本当にこの女ときたら。化け物みたいに強いのは承知してるが、だからこそ悩むところだ」

「ちよつと待て、そこで妙な団結力発揮しないでくれよあんたら!? 化け物呼ばわりは百歩譲って良いけど、苦労をかけた記憶はあまりないよ!」

「「気苦労が……ちよつと酷くてな」」

「溜めまでシンクロしてる!？」

心が通ったように頷き合うグスコとケイン。あまりの扱いに、百戦錬磨の美少女（内面八十歳超えババア）も傷つくのである。

——なおこの間、他のハンターたちは目の前の状況にどう対応すれば良いのか考えあぐね、黙って見続けることしかできなかった。

そしてビスタは途中から完全に無視されるというありさまに、とうとう精神が限界を迎えて気を失っていた。

『亡国』の拠点は壊滅。詰めていた構成員のほぼ全てを排除ないし無力化した上に、組織の幹部であるビスタの生け捕りにも成功。一方で作戦に参加した者の人的被害は皆無に等しく、作戦は文句なしの大成功であった。

それから幾日か経過した頃——

「報酬が入った後の飯は格別に美味いね」

「久々に見たが……本当によく入るな、その量が」

ご機嫌にフォークとナイフを進めるラウラリス。彼女のテーブルに堆積積み上がった皿を目にしたながら、対面に座るグスコは杯に注がれた酒を呷る。ラウラリスの規格外

にいちいち驚いていてはキリがないという、もはや諦めの極致である。

ラウラリスはハンターたちと共に、酒場で作戦の打ち上げをしていた。そして他のハンターとの会話に花を咲かせつつもずっと食を進めていた。その食いつぶりも噂に違わぬというところで、ある種の尊敬に近い眼差しを集めたのはご愛敬。

今は慣れ親しんだ者たち同士で騒いでおり、ラウラリスも知った顔であるグスコとの会話を楽しんでた。

「しかし、やっぱりお嬢さんは凄えなあ。まさか竜を一人で仕留めちゃうなんて。特例で、今回は買い取り報酬も出るんだろ？」

「さんざん調教されて危険種としての本能がかなり薄れてたからねえ。ありゃあ、あんたでも十人いれば普通に倒せるくらいに弱まってたよ」

「それでも十人は必要なか……とんでもねえな。ほんと、先はまだ長いカ」

しみじみと呟きながら、再び酒に口をつけるグスコ。その表情は投げやりとは違った、見据える先を改めて定めた者の顔つきをしていた。

ラウラリスは内心でほくそ笑んだ。この男はまだまだ伸びる。次に会う時が楽しみだ、と。

「それで、今回の仕事は終わったわけだが、この後はどうするつもりなんだい」

グスコは親指で、酒を浴びるように飲んでいる他のハンターを指す。ラウリスたちの視線に気がついたのか、酒精で顔を真っ赤にしながら、上機嫌に持っている杯を掲げた。ラウリスたちも軽く手を上げて返した。

「あいつらに次の仕事に誘われてな。物資の補充が済んだら、ぼちぼちここを出発するつもりさ。そういうお嬢さんは？」

「私はのんびりと、この町の手配犯たちをしばいてから考えるよ」

「のんびりってなんだっけかなあ……………」

ほやいたグスコだったが、こちらに近付いてくる姿に「ん？」と顔を向ける。ラウリスもそちらに目をやると、少しばかり神妙な様子のケインがいた。

「仕事明けの飲み会でしけた顔なんかするもんじゃないよ」

「……………」

ラウリスの側まで来ると、ケインは額に手を当て悩ましげな声を漏らす。場にそぐわない重苦しい様子に、グスコが問いかける。

「隊長さん、何かあったのかい？」

「あつたと言うべきか、これからあると言うべきか…………」

「あなたにしちゃあ要領を得ないね」

ラウリスとグスコに揃って目を向けられ、やがてケインは溜息をついてからラウリスに言った。

「先頃、ギルドを経由して領主からの言伝が届いた。『此度の作戦で奮闘した者を労うためにパーティーを催す。ついでには最も大きな功績を上げた剣姫を是非とも招待したい』と——」

「断る」

もはや反射的とも呼べるにべもない即答であった。それを受けたケインの顔は相変わらず渋い。

「隊長さん、最初からお嬢さんが断るってわかってただろ」

「…………俺としても、領いてもらえるとは思っていなかった。だが、今回の作戦を行うに当たって、領主にも便宜を図ってもらったからな。無下にもできない」

「これがハンターだったら、二つ返事なんだけどなあ」

今度はケインとグスコの視線を浴びるラウリスだったが、彼女は腕を組んでフンと鼻を鳴らす。

この近辺を治める領主にとって『亡国を憂える者』などという危険組織は、いつ爆発するかわからない火薬箱のような存在であったはず。

幸運なことに、ピスタたちはあの砦を拠点として以降、目立った活動を行っていなかった。『危険種の使役』という無駄な研究に専念するために引きこもっていたのだろう。

本格的に行動を起こし、被害が出る前に壊滅したとあらば喜ぶべきことだ。特に、拠点の頭目であり組織の幹部だったピスタを捕縛できたのは間違いなくラウラリスの活躍が一番大きい。感謝を込めて労おうとする領主の気持ちもわからなくはないが。

「そもそも私はハンターじゃないしね。私は今の根なし草暮らしが気に入ってるんだよ。自分から囲われるつもりは毛頭ないよ」

「ま、お嬢さんならそう言うか。権力者と少しでも繋がりができるのを嫌がって、ハンターになるのをやめた女だからな」

「理解が早くて助かる。労いが全部嘘ってわけじゃあないだろうが、唾つけとこうって魂胆が丸見えだ」

むしろハンターではない分、ラウラリスはスカウトしやすいくでも考えているのか。だが、ラウラリスにとっては権力者との繋がりは一番避けたいしがらみだ。

ラウラリスがそういった人間であることはケインにもわかっているだろうに。

「私が断ると最初からわかっていた上で頼み込んでくるか。どいう風な吹き回し

だい」

「……今回だけは俺の顔を立てると思って、折れてくれないだろうか」

詳細を濁してはいるが、このままでは頭を下げかねない勢いだ。

「俺はちよっと席を外した方がいいか？」

居心地の悪さを感じたのか、グスコが気まずげに言うがケインは首を横に振った。

「一番功績の大きい剣姫を是非にとは言ったが、パーティーには作戦に参加したハンター全員が呼ばれている。一足先に彼女に伝える形となったものの、まもなくそちらにも通達があるはずだ」

「そうなのか。じゃあ俺は遠慮なく参加させてもらおう。ここで顔を売っとけば、指名依頼のきつかけになるからな」

ハンターであるグスコはパーティーへの参加を二つ返事で答えた。

腕っ節で成り上がれるハンターではあるが、さらに上を目指すのであればこういった人脈も何かと必要になってくる。チャンスを逃さないという点で、グスコの選択は正しい。

「で、お嬢さんはどうするんだい？」

「……………」

グスコの問いかけを受け、ジロリと鋭い視線をケインに投げかけるラウラリス。先ほどから変わらず、ケインは渋い顔のままだ。

およそ一分近くそうした後、ラウラリスは目つきを緩めた。

「あなたにそこまで頼まれちゃあ仕方がない。良いだろう。今回は特別だ」

「……助かる」

ケインは申し訳なさそうにラウラリスに礼を述べた。そんな彼に、一本立てた指を突きつける。

「だが、こいつはあなたへの一つ貸しだから、覚えときな。それと、引き抜き関連の話には一切付き合うつもりはない。どこかの誰かが一言でも言い出した時点で帰らせてもらう。コレが最低条件だ」

「了解した。徹底するように先方には伝えておこう」

とりあえずの承諾を得られて、ケインの肩から若干だが力が抜けた。ラウラリスの鋭い視線に気圧けおされていたのもあったのかもしれない。

「……隊長さん、大丈夫か？ お嬢さんに借りを作っちゃまうのって結構ヤバくない？」

「いかにこいつが化け物じみた常識外れでも、人道に外れるような要求は出してこないはず……と俺は祈ってる」

「なんであんたらもう仲良さげなのさ!?!」

ラウラリスの絶叫は、周囲の馬鹿騒ぎに紛まぎれて消えていった。

ハンターという職業は、時に『荒くれ者が一攫千金を狙う阿漕あこぎな商売』と思われることがある。事実、そういった点があるのも否定はできない。

あまりにも戦闘職に不向きな幼い子供や可憐かれんな女性を除けば、よほどのことがなければハンターになるための資格は求められない。

ただそれプロシズも銅級銅級の上位。あるいは銀級銀級を経れば印象が変わる。

どの分野、業種であっても入るのは簡単でも、そこから成り上がるのは難しい。銅級銅級の上位の時点で、既に経験豊富。銀級銀級ともなれば一流だ。当然、依頼される内容も難易度が増していく、単に危険種を狩猟していけばよいというわけではなくなる。

特に、銀級銀級ハンターにもなると貴族からの指名依頼が舞い込んでくることもある。貴重な資源の採取や、護衛など。これらを完遂できれば確かな実績となり、さらなる依頼を呼び込むこととなる。

そして、貴族などの権力者や富裕層にとってもハンターは重要な位置を占めてしいる。名のあるハンターとの繋がりは一層のステータスであり、また純粹な力になり得る。彼

らの手に入れた資源を得ることができれば、それだけ自領の利益となるからだ。貴族とハンター。一見すればまるで関わりのない立ち位置にいるようであって、その実は案内持ちつ持たれつの関係なのだ。

それだけに、有能な者ほどハンターというものをよく理解している。基本は根なし草の彼らに貴族のしきたりを強要することはない。必要最低限の礼儀と法さえ守っていれば、大概のことはお咎めなしだ。

つまりは、土地を治める領主様が開催するパーティーであろうとも、よほど薄汚れていなければどんな服装であってもさほど気にされないのだ。むしろ、仕事中の装備を着てほしいと頼まれる場合もあつたりする。

ところが、何事にも例外というのはつきものだ。

ハンターを労働パーティーに無所属の賞金稼ぎが参加していたり。そしてその賞金稼ぎが同性すら羨むほどの美しい少女であつたり。また、その少女が単なる町娘で軽鎧と普段着しか持つていなかった場合だ。

「……やっぱり断わっておきやあよかったかね」

ほやいたラウラリスの前には、長いハンガークラックに並ぶドレスと忙しなく動く女性たち。

「さあラウラリス様、時間もありませんし早速始めましょう」

「……お手柔らかに頼むよ」

一番年長らしい女性の満ちたやる気に反比例するように、ラウラリスの声には力がなかった。

——領主の開催するパーティーの通達があつた一週間後。パーティーまでは暇潰しに手配犯を捕まえようかと考えていたラウラリスだったが、それに待ったをかけたのがまたもやケインだった。

他のハンターよりも先行して屋敷に向かつてほしい、と。眉をひそめつつも素直に従い、屋敷を訪れ案内された部屋に向かったらこの状況だ。

部屋にいる女性は全員、仕立屋の従業員。彼女たちはパーティーに参加するラウラリスのドレスを用意するために招集された、貴族御用達の装飾のプロだった。

さすがに一から衣装を用意するには時間が足りない。そこで既存のドレスに手を加え、ラウラリスのサイズに合わせて調整するということとなった。

最初は気乗りしなかったラウラリスだったが、少しすれば考え直した。

ラウラリスとて女なのだ。おしやれに興味がないわけではない。せっかくの機会であるし、今のラウラリスはうら若き少女。たまにはこうしてドレスで着飾るのも悪くはな